

# コロナ前後のフィリピン英語留学： 2020年2月と2022年12月の調査から

渡辺 幸倫  
Yukinori WATANABE

## 1. はじめに

本稿は、2019年度相模女子大学特定研究助成費(A)(Outer Circleへの日本からの英語留学者の言語意識についての研究)の助成を受けて実施した調査をまとめた研究ノートである<sup>1</sup>。今後確認を要する情報も多々あるが、現段階までの調査の結果を整理したい。

本研究の出発点は、近年多様な英語の自律性を唱える World Englishes (WE論) (Kachru, 1992) の広がり背景に、アメリカやイギリスなどの Inner Circle への留学に加えて、フィリピンなどの英語を公用語とする Outer Circle への留学が広がっているという認識にあった。しかし一定の知見の蓄積がされた始めたフィリピン留学研究(小林, 2020; 羽井佐, 2016; 小張, 2018; 小張, 2021; 渡辺, 2018; 渡辺・羽井佐, 2014など)に比して、その他の Outer Circle の地域(マレーシア、フィジー、マルタ共和国など)の研究は極めて限定的であった。そこで、当初の計画として、研究の起点としてのフィリピンと、日本の学習者が留学先として選んでいるフィリピン以外の Outer circle の国や地域の英語学習環境、および留學生の英語意識の比較研究を行うこととした。しかし、2020年2月のフィリピンでの調査後に新型コロナウイルス蔓延とその影響により同年3月に予定していた調査が困難となり、結果的に渡航を伴う調査が可能となるまで2年以上が経過することとなった。

コロナ禍による留学への影響は甚大であった。日本学生支援機構(2021)によると2020年の海外への留學生数は2019年比で98.6%減であった。同調査ではフィリピンへの留學生数も98.9%減(4,840人から54人)とされていたが、この数字はほぼ日本の大学等からフィリピンの大学等へ正規の留学をしている者に限られている。フィリピン英語留学は、日本学生支援機構の調査対象と異なり、大学生や社会人が個人として参加するケースが多い。大学等の組織的な支援が想定できないため、影響の程度は大学等への正規留学と同程度以上であったことが想像できるだろう。事実、2020年3月に出生された英語学校への営業停止命令などの影響で、かなりの長期間にわたって「全く入学者がいなかった」状態が続いたため、ほとんどの学校が一時閉鎖し、相当数が廃校に追い込まれたことがわかっている。

コロナ禍中には渡航制限により物理的な移動を伴う留学が極めて困難になった反面、オンラインの学びが見直される現象が見られた。コロナ禍以前にもオンライン英会話の利用者は増加傾向にあったが、リモートワークなどの一般化によってオンライン留学の増加に拍車がかかった。一例をあげれば、「ネイティブキャンプ英会話」を展開する株式会社ネイティブキャンプのプレスリリースによれば、コロナ禍前の2019年末に40万人程度であった累計利用者が2022年9月には110万人を突破(同社調べでは日本のオンライン英会話サービスで最大)したという(ネイティブキャンプ, 2022年9月14日)。フィリピンはこの規模拡大の一途をたどるオンライン英会話の主要な講師供給国で、海外留学協議会(2022)の調査によると、「オンライン留学」の実に47.6%がフィリピンであったという。コロナ禍により物理的な移動を伴う留学の機会が激減する中で、日本の英語学習におけるフィリピンの存在感はかえって増大したといえるだろう。

このような重大な変化を経たフィリピンの状況把握をフィリピン以外の Outer Circle の地域の調査より優先することとし、2022年の12月に再調査を実施した。

<sup>1</sup> 本研究は当初2019年度中に完了する予定であったが、新型コロナウイルス蔓延に伴う渡航制限等のため2022年度まで延長された。

## 2. 調査について

フィリピンにおける英語留学の状況を把握するために2020年2月、2022年12月の二度現地調査を実施した。なお両調査は、本学からの語学研修・留学先選定のための視察も兼ねて行った。

### 【第一回調査】2020年2月9日から2月15日(マニラ～セブ～イロイロ～マニラ)

#### 概要

留学生の増加傾向は変わらず、学校ごとの独自性を出すために様々な試みが行われていた。ただし、日本資本の英語学校の新規開校には一服感がみられ、韓国資本の学校では一部では縮小の傾向もみられていた。韓国人留学生の数が減っている可能性も否定できないが、むしろ学校数の増加による分散化が進んでいる側面が強いのではないかという見方が多かった。2013年からフィリピン渡航のたびに英語学校についての聞き取りを行ってきた<sup>2</sup>が、今回の調査からは、フィリピン留学の位置づけのさらなる変化(日本での認知度の高まり、学校間の競争の激化)を感じる事ができた。なお、調査時点での新型コロナウイルスの影響は、中国・台湾との往来が制限されたことによる先行きの不安感があったものの、日本との往来に制限はなく、どのような影響が出るのかを静観しているという雰囲気であった。以下、訪問地ごとの調査結果をまとめた。

#### マニラ(2020年2月9日から10日、15日)

Enderun Collegesの訪問に加えて、日系ビジネスコンサルタント、セブ留学後にマニラで就職した方へのインタビューを実施した。結果、マニラに対する印象の好転を感じる事ができた。日本の留学生の間では、留学先としてマニラに否定的な印象をもつ者が多く、セブの存在感が特に大きかった。しかし、マニラの経済発展、サービス産業を含めた日系企業の進出と駐在家族の増加、日本とマニラを結ぶ航空路線の充実、セブなどでの英語留学を経た邦人のマニラへの就職移住などもあり、マニラの肯定的な側面の発信が多くみられるようになった。これらの影響で留学先としても「ようやく日本人マーケットにもマニラが受け入れられるようになってきた」(マニラの英語学校日本人担当者)と認識されていた。

#### セブ(2020年2月11日から12日)

ZA English UV校(旧ビサヤ大学 ESL)、CDUESL(CEBU Doctors University ESL)、桐原グローバルアカデミー、オンライン英会話のネイティブキャンプ社の担当者の方々にお話を伺った。セブの英語学校では競争が激化しており、独自色をどのように出すのか、その独自色をどのように潜在的な留学生に伝えるのか、ということが話題になることが多かった。

プログラムの独自性という点では英語に加えて、ヨガ、ダンス、スポーツ、ITスキル、インターンシップなど多様な学びを提供することで差別化を図る学校が確認できた。また、寮生活で食住全体を管理しやすいことを利用してダイエットをサポートするというプログラムもあった。また大学付設のESLは日本の大学での単位認定が容易になることから大学生需要をうまく取り込んでいたが、フィリピン側の大学との契約更新ができなくなることがあり、事業の継続性の難しさが指摘されていた。一方、宣伝方法という点ではSNSを駆使したメディアミックスやリピーターを増やすための同窓会的活動など各種の工夫が広がっていることが確認できた。

また、セブはオンライン英会話の一大拠点であり、日系のオンライン英会話事業者でもオフィスを置いているところが多い。大規模なところでは、数十人から百人を超えるような講師が同時にオンラインレッスンを行えるような施設を備えているところもある。また、小規模なところでは、英語学校が帰国後の卒業生にオンラインレッスンを提供し再訪を促したり、留学の事前教育などに使っている例も確認できた。

<sup>2</sup> 相模女子大学特定研究助成費(B)「フィリピン英語留学が言語態度に及ぼす影響：継時的インタビュー及び参与観察を手掛かりに」(2013年度から2014年度)、JSPS 科研費 15K02767「フィリピン英語留学における教室内談話の分析：共通語としての英語使用の観点から」(2015年度から2018年度)など

## イロイロ (2020年13日から14日)

MK Education、Green International Technical College を訪問し、合計6名の日本人留学生からもお話を伺った。地方中核都市であるイロイロの英語学校は、落ち着いた環境と治安の良さをアピールポイントとしていたが、同時に日本からのアクセスの悪さが課題とされていた。2000年代初頭には英語学校が設立されており、比較的早い時期から留学先としての存在感を示していた。韓国資本の学校がほとんどだが、一部には日本資本を受け入れ共同経営となっているところもあった。また、フィリピン国内の高等教育機関としての認証を得て、フィリピンの大学として韓国からの研修を受け入れている学校もあり、多様な発展の形式を感じさせた。

留学生のインタビューでは「フィリピン国内の地域差(マニラ、セブ、イロイロ)は気にならなかった。」「『英語留学』のキーワードで検索したら初めからフィリピンが出てきたので、留学先としての疑念はなかった」などの言葉が印象的であった。これらはいずれも、フィリピン留学の認知度が高まっている表れと解釈できるだろう。

## 【第二回調査】2022年12月4日から9日(セブ～マニラ)

### 概要

第二回の調査ではコロナ禍を経た2022年末の英語学校の状況把握と、あえて「今」フィリピンに英語留学する人たちの考えについての聞き取りを行った。コロナ禍で停止していた留学生の受け入れは2022年夏ごろから再開されるようになったが、日本からの留学生の戻りは韓国に比べると遅かったようだ。2020年3月から二年間にわたった実質上の受け入れ停止期間に多くの英語学校が廃業し、再開できたところは3分の1から4分の1程度という状況だった。留学生の聞き取りでは、大学生、社会人ともにはっきりと目的を言語化できる方が多かったことが印象的だった。留学先としてのフィリピンについての意識も、初めから留学先の選択肢としてフィリピン留学があり、逡巡した経験を感じさせない語りが多かった。フィリピン留学が認知されてきていること、中学高校時代のフィリピン人ALTの存在、コロナ禍に拡大したオンライン英会話などでのフィリピン英語との接触経験などが影響していることが示唆された。以下、訪問地ごとの状況、および留学生へのインタビューについてまとめた。

## セブ(2022年12月4日から6日)

BAI Hotel Campus Language Center (旧CDUESL)、GLC Global Language Cebu (旧IDEA CEBU)、Cebu International Academy (CIA)、ラプラプセブ国際大学を訪問した。

2020年3月半ばの出入国制限と営業停止命令時には大混乱となり、日本への帰国(チャーター便の手配、座席の確保、空港への送り届けなど)や授業料の返金などのアフターケアで各学校の対応力が試された。円滑にこれらを行うことができた学校があった一方で、残念ながら随分と評判を下げた学校もあったという。

その後の「留学生0人」の状況は2年ほど続き、その間多くの学校が廃校となった。比較的新規の学校は撤退も早かったが、廃校を免れた学校も、再開の見込みが立たない中で存続のための様々な対策が取られた。具体的には、より賃貸料の安い場所にキャンパスを移したり、雇用している講師を使ってオンライン英会話を提供したり、日本や韓国からの送金によって事業を維持していたという事例があった。

セブでは2022年3月には2校が再開したのが最速で、その後の動きは遅かったようだ。当初には「ロシアからの留学生が多かった」という話も聞かれた。6月から7月頃になると、大手の英語学校も再開し始めた。この時点でコロナ前に130校ほどあった認可学校のうち再開までこぎつけたのは30から40校ほどであったという。

2022年の夏には再開した学校の多くが満室となった。比較的戻りが早かったのは「常連」の高校や大学で、コロナ以前に築いた信頼関係が功を奏したという話を複数聞くことができた。また、コロナ禍中にオンライン英会話を提供していた学校では、オンラインを入り口に実際の留学に移行するという流れもあったようだ。しかし、夏の繁忙期後は振るわず、2022年12月から2023年1月の繁忙期には韓国からの受け入れを多くしている学校は盛況であったが、日本からの留学生は戻りが遅いということであった。



## マニラ (2022年12月7日から9日)

2020年にも訪問していた Enderun Colleges を再訪し、日系ビジネスコンサルタントの方や外国人向け英語学校を管轄する観光省でのインタビューを実施した。マニラの英語学校もコロナ禍の最中はオンライン化することで何とか経営を維持し、現在やっと学生が戻り始めているという様子であった。2020年の時点でようやく留学先の都市として認知されるようになってきていたマニラの様子は振出しに戻ったような印象だった。調査時にはまだ日本人留学生は大変少なく、留学生のインタビューでは「留学経験には大変満足しているが、マニラを選んだのは大学が提携していたからでそれ以上の理由はなかった」と語っていたことが印象的であった。

## 留学生へのインタビュー

渡航前に現地の協力者に依頼し、滞在中に下記8名の留学生を紹介してもらった。インタビューはおおよそ1時間程度で、2-3名のグループインタビューおよび個人インタビューであった。インタビューでは、自己紹介から始まり、留学の目的、留学情報の収集方法、留学にあたって期待していたこと・心配していたこと、実際に留学してみての感想などを中心に、比較的自由に話してもらった。まず、印象に残ったのは目的意識が強く、学生なら留年してでも留学したい、転職中のスキルアップ、などはっきりと目的を言語化できる人が多かったことである。一方、英語に対する意識については以前の研究との差を感じた。過去のインタビュー（渡辺, 2018; 渡辺・羽井佐, 2014; 渡辺・羽井佐, 2015）では、フィリピン英語に対するマイナスイメージを持つ人が、留学先を選ぶ段階での情報収集や留学エージェントの話聞きながら自分を説得していく過程の存在が示唆されていた。しかし、今回のインタビューではこの過程はあまり感じられず、初めから「スキルとしての英語を学ぶならフィリピン留学はコスパが良い」というような直線的で逡巡した経験を感じさせない語りが多かった。

月日	名前	年代	性別	経歴/学生	出身地	留学先	留学期間	インタビュー時点での留学期間
12月5日	Aさん	30代後半	男性	個人事業主 (WEBデザイナー)	関東	セブ	4か月	約3か月半
12月5日	Bさん	20代前半	男性	大学4年生 (留年中)	関東	セブ	3か月	約1か月半
12月6日	Cさん	20代前半	男性	大学4年生 (留年予定)	関東	セブ	6か月	約3か月
12月6日	Dさん	20代前半	女性	2022年3月に 大学卒業	関西	セブ	3か月	約2か月
12月6日	Eさん	20代前半	女性	2022年3月に 大学卒業	関東	セブ	3か月	約2か月
12月6日	Fさん	20代前半	女性	大学3年生	中国地方	セブ	6か月	翌週帰国予定
12月6日	Gさん	20代前半	女性	大学3年生	中国地方	セブ	5か月	約4か月半
12月7日	Hさん	20代前半	女性	大学2年生	関西	マニラ	6か月	約3週後帰国予定

## 3. おわりに

韓国資本の英語学校から始まったフィリピン英語留学が、当初「日本人にはアジアのフィリピンで英語を学ぶことへの抵抗感がある」(毎日新聞, 2007年11月5日)と考えられていた。しかし、羽井佐(2017)では、実際に留学した者の多くがフィリピンで学ぶ英語は、通用性が高く、目標として価値あるものと語っており、Inner Circleの「優れたネイティブ英語」を規範とする階層化した旧来の英語理解から、英語のコミュニケーション機能を重視する English as a Lingua Franca (ELF論) (Jenkins, 2007) に依拠する言語態度への変化の兆しが確認されていた。一方で、コロナ前にはすでに、この通用性を軸にしたコミュニケーション上の機能を重視した

英語観への変化が、「アメリカ英語」や「ネイティブ」といった付加価値を失わせ、「どんな英語も英語は英語」という言葉に象徴される一般商品化(コモディティ化: commoditization)を進行させていたという解釈が提示されるに至っていた(渡辺, 2018)。

本調査からは、このような流れがコロナ禍とそれに続く円安によって加速したことが示唆された。すなわち、物理的な移動を伴う留学は厳しく価値を吟味される対象となり、目的意識の高い留学生を増加させた。英語留学の意味を通用性の高い英語スキルの習得と考える人々にとっては、「コスパ」は重要な要素で、フィリピン留学の価値を高めた。また、リモートの拡大は、オンライン英会話を通じたフィリピン英語との接触経験の拡大につながり、フィリピン英語の有用性の認知を広め、留学を後押ししていることがわかった。

結論としては、コロナ前にすでに兆しを見せていた、WE論やELF論による英語の一般商品化が、コロナ禍によってさらに加速し、日本の学習者の発話を抑制してきたといわれる英語ネイティブ偏重の態度を緩和させている。フィリピン英語留学は、長年日本の英語教育の課題とされてきたネイティブ偏重の傾向の変化が顕在化している好事例といえる。今後の展開についても注目していきたい。

## 謝辞

本研究は、2019年度相模女子大学特定研究(A)の助成を受けました。

## 参考文献

- 海外留学協議会. (2022). 海外留学協議会 (JAOS) による日本人留学生数調査. <https://www.jaos.or.jp/wp-content/uploads/2022/06/2021%E7%89%88JAOS%E7%95%99%E5%AD%A6%E7%94%9F%E7%B5%B1%E8%A8%88%E8%AA%BF%E6%9F%BB220616.pdf>
- 株式会社ネイティブキャンプ. (2022年9月14日). 「ネイティブキャンプ オンライン英会話サービス最大!世界累計利用者数110万人突破」. <https://prtmes.jp/main/html/rd/p/000000467.000012419.html>
- 小林葉子. (2022). 日本人英語学習者による欧米とアセアン(準)英語圏への留学順序と目的. *Artes Liberales = アルテスリベラレス*, 110, 33-45.
- 小張順弘. (2021). フィリピン英語と日本の英語教育. *アジア英語研究*, 23, 4-28.
- 日本学生支援機構. (2022). 日本人学生留学状況調査. [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/ryugaku/1412692.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1412692.htm)
- 羽井佐昭彦. (2016). フィリピン英語留学が日本人学習者の言語態度に与える影響. *相模女子大学紀要 = The journal of Sagami Women's University*, 80, 11-24.
- 毎日新聞. (2007年11月5日). 「世界見てある記:セブ島(フィリピン) 語学留学の韓国人殺到」
- 渡辺幸倫. (2018). 国際英語論からみたフィリピン英語留学における商品としての英語教育の考察. *相模女子大学文化研究*, 36, 41-54.
- 渡辺幸倫 & 羽井佐昭彦. (2014). フィリピン英語留学が言語態度に及ぼす影響: 継時的インタビューを手掛かりに. *相模女子大学文化研究/編集委員会 編*, (32), 47-66.
- 渡辺幸倫 & 羽井佐昭彦. (2015). フィリピン英語留学が言語態度に及ぼす影響: 継時的インタビュー及び参与観察を手掛かりに. *相模女子大学文化研究*, (33), 27-37.
- Jenkins, J. (2007). *English as a Lingua Franca: Attitude and Identity*. Oxford: Oxford University Press.
- Kachru, B. (1992). World Englishes: approaches, issues and resources. *Language Teaching*, 25, 1-14.